

かわむらこどもクリニック NEWS

Volume 1 No 3

3号

平成5年8月7日

新生児医療の進歩

その1

長年携わってきた新生児医療について、話して見ましょう。

小生が新生児医療と初め出会ったのは、今からもう15年も前のこととなります。国立仙台病院小児科で研修中に、内地留学の形で、国立小児病院の新生児科に行ったのが始まりでした。

その頃はまだ、新生児学が独立していなく、小児科学の一領域と考えられていました。1000gより小さい、超未熟児と呼ばれる赤ちゃんたちも、10人の内3~4人ぐらいしか助けられず、そのうち半数近くが後遺症を残すという時代でした。そんな中であって、国立小児病院の新生児科は、トップの成績を示していました。

小児病院での最初の1ヶ月は、住むところも決まっていず、病棟内に寝泊りをしていた記憶が、今も鮮明に思い出されます。

その後は、仙台赤十字病院周産期センターから日立製作所日立総合病院の新生児集中治療室の開設のため、住み慣れた仙台を離れ、日立に赴任しました。新生児集中治療室の設計、機器の購入等全て任せられ、昭和61年7月には新生児集中治療室が開設され、初代主任医長となりました。

話が横道にそれましたが、ここ十年で、新生児医療も大きく変わり、皆さんもNHK等でも報道されたように、4つ子、5つ子も生存できるようになりました。

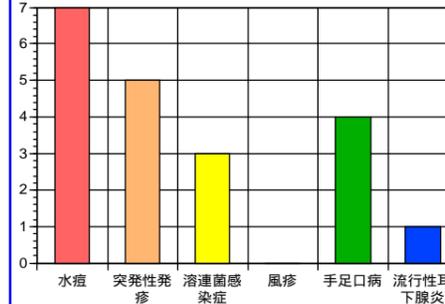
最近の日立総合病院新生児集中治療室の成績では、10

00g未満の超未熟児の生存率は85%を超えるようになりました。最も小さい赤ちゃんは、在胎23週1日(つまり予定日から4カ月と1週間もはやく)で579gでした(左側の写真が生まれたときのものです)。大きさは、ちょうど大人の両手のひらに乗るぐらいと考えてください。大人の指より、その子の腕の方が細いぐらいです。そんな小さな赤ちゃんに呼吸するためのビニールの2mmの管を入れ、糸のような血管に点滴を入れるのです。そして呼吸を助けるために人工呼吸器を装着し、保育器に収容し、医者と看護婦が付きっきりで治療するのです。ちょっとした体の動きで、全身紫色になったり、息を休んでしまい脈拍が遅くなったり、スタッフは、ひとときも気が抜けません。小さい赤ちゃん達は何も言わないため、動きや、状態により判断し治療しなければなりません。そして何より大切なのは、目の前の赤ちゃん達をひとりの人間として、思いやりをもって扱い、そのことが赤ちゃん達の明るい将来に結び付いていることを考えながら治療することです。そう考えるようになって、小さな赤ちゃんの後遺症も減少してきたのです。その証として、日赤で見ていた、576gの子が今では、小学校3年生になり、元気に学校へ通っています。



もう一度成績の方に戻りますが、現在では在胎28週(予定日より3カ月は早い)で1000gあれば元気に育つ可能性が、かなり高いと考えてください。この写真の赤ちゃんは育子ちゃんで25週3日836gで生まれ、1歳のときの写真でも元気です。(以下次号へ)

7月の感染症の集計



7月の伝染性疾患をグラフにしました。相変わらず水痘が多く見られます。先月あまり見られなかった手足口病も集団の中で発生しています。溶連菌感染症も見られ、流行性耳下腺炎(おたふく)が、少し見られるようになりました。



医学マメ知識

その3

ひきつけについて

今回も頻度は多くないものの、お母さん方に、特に大きな不安を与えるひきつけについてお話ししてみましょう。ひきつけのうち、熱性けいれんは小児科では珍しいものではありません。

ひきつけとは、 どんな状態を言うのでしょうか

ここでは、一般的なひきつけについて話しましょう。ひきつけは、医学的には“けいれん”と呼ばれています。けいれんは、意識がなく筋肉の異常な硬直(固くなること)やガクガク震えることを言います。大事なことは、意識がなくなる、つまり呼びかけなどにも応えないということです。

ひきつけを起こす病気には、 どんなものがあるのでしょうか

ひきつけの原因にはいろいろあり、脳の病気が最も重要です。例えば脳炎や髄膜炎でも起こるし、頭部を強打することでも起こります。また“てんかん”と呼ばれる精神病の一種でも起こります。他にもいろいろな病気により起こることがあります。そのような病気を除外して、発熱によって起こるものを、**熱性けいれん**(熱によるひきつけ)と呼んでいます。

熱性けいれんは、どんな病気ですか

お母さん方も経験したことがあると思いますが、大人では、突然体温が上昇する時、寒気がしてガクガク震えることがあります。子供の場合には、それが強く現われひきつけになると考えられています。

けいれんを起こすと体をつっぱったり、ガクガクさせるだけでなく、唇が紫色になったり、顔色が悪くなったりします。

特徴を要約すると、熱性けいれんは、生後4ヶ月~6歳までに発病し、38以上の発熱をとめない、持続時間は20分以内で、左右対称性で、短時間の間に何度も繰り返さない、良性的けいれんです。

熱性けいれんは誰でも起こるのでしょうか

熱性けいれんの頻度は5%~10%ぐらいと言われ、大体10~20人に一人の割合で起こります。1歳台に多く、

男の子がやや多いようです。また兄弟に見られると起こる可能性が高くなります。

熱性けいれんを、 起こしたらどうしたらいいでしょうか

自分の子供がけいれんを起こして、あわてないお母さんはいません。でもこの記事を読み出して、お母さんがしっかりすることが大切です。

以下にお母さんがすることを**箇条書**にしておきます。

おでこに手を当てるか、体温をはかり熱のあることを確認します。

起こった時間を確認し、衣服をゆるめ、解熱剤の坐薬を挿入します。

観察をします。

舌を噛むのを心配して、物を口にに入れる必要はありません。どんな形のけいれんなのか観察します。

じっと待ちます。

待っている時間というのは、非常に長く感じるものですが多くは5分以内に止まります。10分以上持続するようなら病院を受診するようにしましょう。

止まってしまって、意識が戻って泣くようになれば、そのまま様子を見て構いません。

後遺症が、心配なのですが。

熱性けいれんは、良性的病気で後遺症の心配はありません。他の病気、例えば脳炎、髄膜炎やてんかんであれば後遺症を起こす可能性があります。そのような病気を除外するためにも、特徴からはずれるような、熱の無いけいれん、長時間の持続や激しく吐くなどの症状の見られるときは、病院を受診しましょう。

熱性けいれんは良性的の病気です。お母さん方はこの記事を読み出して、慌てないようにしたいものです。

編集後記

またまたやっとの思いで出すことができました。毎回、言い訳ばかりです。どなたか投稿してくれる人いませんか?

今回で3号です。1、2号欲しい人は、受け付けまで申し込んでください。当院で働きたい人いませんか?



MEMO MEMO

手足口病

夏になるとよく見られる伝染性の病気で、エンテロウイルスによって起こります。発疹は手足に中心にで、手のひら、足の裏に水疱が出るのが特徴です。口

の中にも出て痛がる場合があります。熱はあまり出ず、1週間程度で治ります。集団生活で伝染しますが、出席停止の決まりはありません。

8月のお知らせ

栄養育児相談

4日、18日(水)

13;30~

参加無料、栄養士担当

予防接種はありません

詳しくは掲示板を参照してください

夏期休暇

8月12日(木)

14日(土)

15日(日)

16日(月)

目次に戻る

前の号

次の号